

# 学生の思考力、社会性育む

## デーリー東北×八学大 NIE事業

### 成長実感「視野広がった」

八戸学院大などは4年前から、デーリー東北新聞社と提携し、新聞を教育に活用する「NIE」事業として、学生にデーリー東北の記事を読んだ感想を書いてもらい、思考力や社会性を育む取り組みを続けている。学生は事業を通じ「物事に対し視野が広がった」などと、自身の成長を実感している様子だ。

全国から学生が集まる大学で本紙を教材にした理由について、事業を主導する茂木典子教授は「卒業してどこへ就職するにしても、まずは今、生活している地域のことをしっかり知ってもらうことが大切」と説明。井上丹講師も「スマホ(スマートフォン)のニュースは表面的で全国の話題になりがち。地域社会を添え、メリハリを切る形でスタートした。18年度は八戸学院大の課外授業として女子のバスケ、ラグビー各部を中心に、約30人を対象に、昨年7月から7カ月間、毎日実施。切り貼りの手間は省き、感想を学生間で共有する目的で、記事をスマホで撮影し、感想を添え、メッセージングで送信する方法としていた。大半の学生は、それまであまり新聞を読んでいなかったという。感想では、初めのうちは簡単な同意で済みますが多かったが、徐々に自身の意見や批判も書き込むようになり、文章も長くなっていった。大学側は、多面的な物事の見方が培われていった証しと捉えている。

「新聞は父や祖父ら年上の人が読むもの。最初はちよつと(抵抗があった)」という女子サッカー部の西館永遠(とほろ)さん(20)「八戸出身」。地域やスポーツ面など、心のある話題を読み進めるうち、「意外に読みやすく地元の話題も豊富」と親しみを感ずるようになっていった。

茂木教授は「就職に役立つ」といった効果を求めただけでなく、紙面構成や一貫性、見出しの大きさといった新聞の特徴を理解した上で読むことが肝要と強調する。授業や部活動に打ち込み

あるので選ぶのに悩んだ。そんな中、目を引いたのがタレントで実業家の田中義剛さんを取り上げた「エゴノミック・マンデー」だ。「八戸出身の人が全国で活躍していることを知り驚いた」と感心し、新聞への興味を深めていった。

今では「読んでいるうちにどんどん分かることが増えたので、楽しくなってきた」「同じニュースでも、テレビやスマホより詳しくて覚えやすい」と、利点をかみ締めている。



2018年度のNIE事業を振り返りながら最終ワークシートに書き込む八戸学院大の学生(11月30日、同大)



参加した学生が新聞を読んだ感想について意見を交換。多様な物事の見方を養う(11月30日)

18年度の取り組みを終え「記事を話題にする」と親との会話も広がって良かったと振り返り、「新聞をめぐって見出しを見て、興味を持った記事を読むようにしている」と続ける。

同部の奥山紗良(とら)さん(20)「五戸町出身」も当初は「いっぱい記事がながら毎日感想を書くのは、学生にとって骨の折れる作業だったはず。全員がやり切ったわけではなかったというが、茂木教授は「投げ出した学生はおろそか、読んだけども続けたことに価値がある」と語り、教文字の成長に思いをはせた。(工藤文一)